

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：37703
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520558
 研究課題名（和文） 日本語教育用文法用語の通時的かつ共時的研究-その出自から使用の実態まで-
 研究課題名（英文） Diachronic and Synchronic Study on JSL/JFL Grammar Terminology — from Origins to Present Actual Usage —
 研究代表者
 新内 康子（SHIN' UCHI KOKO）
 志學館大学・人間関係学部・教授
 研究者番号：70258680

研究成果の概要（和文）：日本・タイ発行の日本語教科書における文法用語の使用実態調査、国内外の日本語教師等に対する質問紙調査を行い、日本語教育用文法用語の使用傾向を明らかにした。出自に関しては、「い形容詞」「な形容詞」について日本語教科書等を分析して再検証をするとともに、「て形」「ない形」「辞書形」といった用語の出自に関して言及している文献についての解題も行った。これらの結果をもとに、統一した日本語教育用文法用語の提案も試みた。

研究成果の概要（英文）：This study defined trends in Japanese as a Second/Foreign Language grammar terminology (JSLGT) through analysis of Japanese language textbooks published in Japan and Thailand, and analysis of questionnaires filled out by teachers and volunteers in Japan and overseas. Moreover, we examined the origins of the terms *i-keiyoshi* (*i-adjective*) and *na-keiyoshi* (*na-adjective*). Earlier studies say that the first user of these terms was Mr. Isago Mio. We also commented on studies which discussed the origins of terms such as *te-form*, *nai-form*, and *dictionary form*. Based on our findings, we proposed a unified JSLGT model.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育・日本語教育史・日本語教育用文法用語・国語科文法用語

1. 研究開始当初の背景

日本国内では定住型外国人等の増加にともない生活日本語の必要性が叫ばれて久しいが、日本語教育用文法用語（以下、「日本

語教育用文法用語（JSL Grammar Terminology）、略して〈JSLGT〉と呼ぶことにする）の出自や現在の使用実態およびそのあり方に関して日本語教育界では十分研究されて

きていない。また、一つの文法概念を示すのに多様な JSLGT が使用され、日本語学習者や日本語教師がその対応に混乱している現実もある。

一方、外国人児童生徒が通う国内の小・中学校等における国語の授業では、日本語教育文法の指導上の重要なツールとなる JSLGT は、通常登場することはない。したがって、「てフォーム」「たフォーム」「ない形」「辞書形」「な形容詞」「い形容詞」などのような JSLGT は、国語科文法（学校文法）が扱われている教科書参考書等でもほとんど用いられていない。国語科の授業で学年が進むにしたがってメタ言語として重要な機能を果たす文法用語が、日本語の授業と国語の授業でそれぞれ異なり、かつその橋渡しのための手当も行われていないとすれば、その改善を急がなければならないと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、文法教育のあり方、とりわけ JSLGT のあり方の視点から、今後の日本語教育と小学校・中学校における国語科教育との連携強化に寄与することを目指し、以下の2点を目的とする。

- (1) JSLGT と学校文法用語の使用実態を明らかにし学習者にとって簡潔で理解しやすい用語を提案する。
- (2) (1)を試みるにあたり、簡潔で理解しやすい用語が多いと考えられる JSLGT の出自変遷を辿る。

3. 研究の方法

- (1) JSLGT と学校文法用語の使用実態調査方法は、次のとおりである。
 - ① JSLGT の使用実態調査：日本語教科書（指導書を含む）分析と、日本語教師・ボランティアに対する質問紙調査を行う。
 - ② 学校文法用語の使用実態調査：国語教科書（小学校用・中学校用、指導書を含む）分析を行う。
- (2) JSLGT の出自については、日本語教科書ならびに文法研究関係史料を分析する。

4. 研究成果

- (1) JSLGT と学校文法用語の使用実態
 - ① JSLGT の使用実態

日本(1971-2008年)ならびにタイ(1969-2009年)で発行されたそれぞれ50種、計100種の教科書で JSLGT の調査分析を行った〈プランラップ(2012)〉。また、日本語教師等に対しては、海外で教える日本語教師を中心とし

て質問紙調査(2010年8月-2011年6月実施)を行い、回収した193件について単純集計とクロス集計を行った〈新内ほか(2012)〉。また、国内では留学生を指導している日本語教師(22名)と長期滞在者にボランティアで教えている者(25名)に対しても、同一の質問紙を用いて2010年に調査した〈パッチャランほか(2012)〉。

具体的に取り上げた JSLGT とは、動詞の活用形名(ない形、ます形、て形、た形、辞書形、意向形)、活用変化の違いによる動詞グループ名、い形容詞名、な形容詞名、丁寧体・普通体名の10項目である。また、学校文法等でも使用される一般性のあるもの(助詞・自動詞・他動詞・非過去・受け身・使役・尊敬・謙譲・主題等19項目)も参考調査項目として取り上げた。

そのうち、教科書100種と、主に海外で教える日本語教師との JSLGT 使用実態を比較した結果を挙げると、以下のとおりである。

- ア) 教科書と海外の教育現場における JSLGT の使用実態はほぼ同じ傾向にある。
- イ) 教科書では使用されているものの現場の教師は使用していない用語は、次の5種類である。
 - [た形類] abrupt past
 - [辞書形類] indicative
 - [動詞グループ名] consonant / vowel / irregular verbs、pattern group1・2・3・4・5
 - [な形容詞類] attributives
- ウ) 教科書の場合より教師が2倍以上使用しているものは、次のとおりである。
 - [形態的特徴を明示した用語] ないを含むnai form、て形、ですますの形・だの形
 - [意味・機能・概念等を明示した用語] 過去形、意向形、意志形、丁寧体・普通体
- エ) い形容詞類は JSLGT のなかで最も教師が使用している用語である。
- オ) 「い形容詞・な形容詞」「i-adjective・na-adjective」「形容詞・形容動詞」「形容詞1・2」「い・な type adjective」はセットで使用されており、日本・中国台湾・韓国を除くアジア地域では、「い形容詞・な形容詞」と「i-adjective・na-adjective」が混用されている。

以上の結果も踏まえ、多様な JSLGT が使用されている現状改善のために、統一した JSLGT として下記の用語を提案した。なお、用語に使用した「カット」「形」「グループ」

「体」「形容詞」は、各言語訳も使用可とするものとする。

- ◇ます形類：ますカット形
- ◇ない形類：ないカット形
- ◇て形類：て形（「て・で」を含む）
- ◇た形類：た形（「た・だ」を含む）
- ◇辞書形類：じしょ形
- ◇意向形類：いこう形
- ◇動詞グループ名称類：
 - 1 グループ<いわゆる一段活用動詞>
 - 2 グループ<いわゆる変格活用動詞>
 - 3 グループ<いわゆる五段活用動詞>
- ◇文体名称類：ていねい体・ふつう体
- ◇い形容詞類：い形容詞
- ◇な形容詞類：な形容詞

②学校文法用語の使用実態

東京都公立小学校（H17-20年度使用）と公立中学校（H18-21年度使用）で採択率が高かった国語教科書（小学校：「光村図書」「教育出版」、中学校：「光村図書」「三省堂」「教育出版」）に私立小学校が独自作成した「むぎ書房」の『にっぽんご』シリーズを加え、計6種を分析し、日本人児童生徒のみならず外国人児童生徒にも理解しやすい学校文法用語として次の用語を提案した<田中(2012)>。

- ◇未然形：「ない」が続く形、「う・よう」が続く形
- ◇連用形：「ます」が続く形、「た」が続く形
- ◇終止形・連体形：言い終わる形
- ◇仮定形：「ば」が続く形
- ◇命令形：命令する形
- ◇五段活用動詞：1グループ動詞
- ◇一段活用動詞：2グループ動詞
- ◇変格活用動詞：3グループ動詞

(2) JSLGT の出自

①日本語教科書等

三尾砂(1942)『話言葉の文法(言葉遣篇)』帝国教育会がその出自とされている「い形容詞」「な形容詞」について、1942年以前発行の日本語教科書等を分析することによりその再検証を行った結果、下記の2点を明らかにした<新内(2011)>。

ア) 三尾がいう「い形容詞」は、J. ロドリゲス (*ARTE DA LINGOA DE IAPAM*:1604-1608)、J. J. ホフマン (*A JAPANESE GRAMMAR [Translated from the Dutch]*:1868) の用語とほぼ同一の発想で使用されており、

C. ノッス(あるいはR. ランゲ)の *adjectives in i (A TEXT-BOOK OF COLLOQUIAL JAPANESE BASED ON THE LEHRBUCH DER JAPANISCHEN UMGANGSSPRACHE*:1907) とほぼ同一と見なすことができる。

イ) 三尾がいう「な形容詞」は今日の「な形容詞」より広い範疇のものを含んでいる。今日のものと指し示す範囲が一致しているものは、S. R. ブラウン(*COLLOQUIAL JAPANESE OR CONVERSATIONAL SENTENCES AND DIALOGUES IN ENGLISH AND JAPANESE*:1863) と青年文化協会(*日本語練習用日本語基本文型*:1942)である。また、三尾のものは、S. R. ブラウンの用語 *adjectives in Na* とほぼ同一と見なすことができ、J. ロドリゲスの用語とも類似性が高い。

②出自研究関連文献解題

出自に関する本格的な研究は少ないなか、出自そのものの研究でなくてもその糸口を探るのに役立つと思われるものなど、JSLGT 出自に関して言及している文献について解題を行った<関(2012)>。取り上げた用語は下記のとおりである。

- *て形・てフォーム／た形・たフォーム
- *辞書形・dictionary form
- *ない形・ないフォーム
- *ます形・ますフォーム
- *意向形(および、その関連語)
- *動詞第1グループ・第2グループ・第3グループ(および、その関連語)
- *い形容詞・な形容詞
- *文型
- *丁寧体・普通体
- *日本語教育用文法用語全般

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

- ① 新内康子、関正昭、日本語教師の日本語教育用文法用語使用実態—主に海外で教える教師に対する調査結果より—、日本語教育用文法用語の通時的かつ共時的研究—その出自から使用の実態まで—、*科研報告書*、査読無、2012、7-22
- ② ブンラフ・ナリサラ、日本語教育用文法用語の使用実態—タイ国内の日本語教科書(50冊)の調査結果—、日本語教育用文法用語の通時的かつ共時的研究—その出

自から使用の実態まで-、科研報告書、査読無、2012、23-38

- ③ パッチャラパン・コーサンラワット、関正昭、日本国内の日本語教育機関における日本語教育用文法用語の使用実態-留学生を対象に日本語を教えている教師とある地域の長期在住者にボランティアで日本語を教えている教師との比較-、日本語教育用文法用語の通時的かつ共時的研究-その出自から使用の実態まで-、科研報告書、査読無、2012、66-77
- ④ 関正昭、日本語教育用文法用語の出自研究関連文献解題、日本語教育用文法用語の通時的かつ共時的研究-その出自から使用の実態まで-、科研報告書、査読無、2012、79-85
- ⑤ 田中利砂子、国語教科書における文法用語について-小・中学校用国語教科書を中心に-、志學館大学人間関係学部紀要、査読無、33巻、2012、87-99
- ⑥ 新内康子、関正昭、日本語教育用文法用語の使用実態-その統一化を目指すための基礎的研究-、日本語教育学会研究集会第10回中国地区予稿集、査読有、2011、75-80、
- ⑦ 新内康子、日本語教育用文法用語としての「い形容詞」「な形容詞」の出自について、日本語教育史論考第二輯、査読有、2011、39-50

[学会発表] (計1件)

- ① 新内康子、関正昭、日本語教育用文法用語の使用実態-その統一化を目指すための基礎的研究-、日本語教育学会研究集会第10回中国地区、2011年12月17日、広島YMCA (広島市)、

[図書] (計0件)

[その他] ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新内 康子 (SHIN' UCHI KOKO)
志學館大学・人間関係学部・教授
研究者番号：70258680

(2) 研究分担者

関 正昭 (SEKI MASA AKI)
東海大学・国際教育センター・教授
研究者番号：21038663

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

田中 利砂子 (TANAKA RISAKO)
志學館大学・非常勤講師
ブンラープ ナリサラ (NARISARA POONLARP)
国際交流基金バンコク日本文化センター・日本語部・専任講師
パッチャラパン コーサンラワット (KOSALWAT PATCHARAPAN)
東海大学・文学研究科・博士課程前期学生